



坪井 良治 Tsuboi Ryoji

東京医大皮膚科主任教授

1954年広島県生まれ。80年防衛医大卒。順天堂大院修了、ニューヨーク大留学などを経て、90年順天堂大皮膚科講師。88年に同助教、2002年より現職。

すぐに治らない場合は しっかり経過を説明することが大事

薄

毛関連の市場は1千億円に上るとも言われているが、科学的根拠に基づかない治療法が横行しているのが現状だ。そこに一石を投じたのが、日本皮膚科学会が今年4月に発表した「男性型脱毛症診療ガイドライン」だ。坪井さんはその策定委員長を務めた。特徴的なのは具体的に商品名を挙げ、国内外のエビデンスを基に推奨度を定めて、治療アルゴリズムを作成している点だ。

「ガイドラインを出して注意を促したかったことは三つあります。一つ目は悪質なヘアサロンが過剰な効果を謳い、診療まがいの行為をしていること。二つ目は化粧品誇大広告によって、消費者が育毛剤に対して誤解を持ってしまうこと。三つ目は感染などを引き起こす恐れのある人工毛植毛術についてです」

その中でも、特に問題視したのが悪質なヘアサロンの存在だ。年間で数百万円が必要になる場合もあるという。「ガイドラインは皮膚科医のために作られたものですが、患者さんが適切な治療やヘア

ケアを受ける時の参考にもしていただければと思っています」

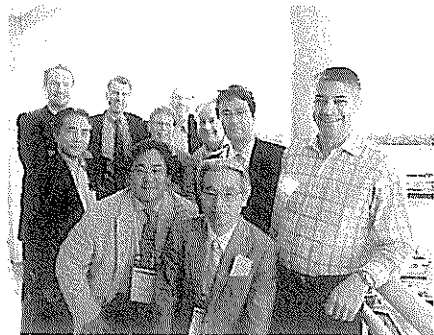
男性型脱毛症は男性の約3分の1が発症する身近な問題であるだけに、ガイドラインに対する反響は大きかった。一方で、抗議も寄せられたが、それは覚悟の上だった。今秋には円形脱毛症のガイドラインも公表される予定だ。

皮

皮膚科医の道を歩んで以来、診療する時に特に心がけているのは十分な説明を行うこと。

「皮膚科は治ったか、治っていないか、患者さんにも分かりません。だから、早く正確に治すことは必要ですが、すぐに治らない場合はしっかり病因や経過を説明することが大事なんです。何かを質問されて『分からない』と答えてしまうと、患者さんは離れてしまうと思います」

坪井さんが専攻を決めた当時、皮膚科は内科や外科に比べてマイナーな診療科だった。しかし、現在では状況は一変。むしろ、多くの学生が外科を敬遠するようになってきた。



オーストラリア・ケアンズで行われた世界毛髪研究会議の幹事会にて(今年6月)

東京医大病院の副院長も務める坪井さんは「各科における医師の偏在は、これから相当問題になる」と外科離れに危機感を強める。「いま各科のバランスの取れた医療の仕組みが求められています。どうやったら卒業生に外科への魅力を感じてもらえるのか。待遇改善や訴訟対策などを早く整備しないと手遅れになります」

趣味はダイビング。10年前から始め、年に3回は潜りに行く。シユノーケリングのお薦めポイントはその那覇市から高速船で1時間ほどの所にある古座間味海岸。白浜の先に広がる珊瑚礁がお気に入りだ。